

雑詠日記

海蝶夢話

卷の三

二〇〇八年

市井一人

歳末雑感

老年を迎える時期に自由を得ようと少し早めに退職する道を選び、手始めに中国へ渡って短い間でも住んでみるということで自由を実現しようとした。そこでの生活はたしかにわたしに得難いものを与えてくれた。ところが、時間を区切られていた以前よりも、この二年間は本を読み思索する時間がむしろ減っていることに当惑している。そのせいだろうか、詩情を喚起されることも少なくなつて、この雑詠日記に書きとめるつぶやきも減つた。生活の切り替えが多く、の対価を払つて実現されつつあることを知らされる。関わりのある成り行き全体が、わたしの人生の地層として積もつていくのだ。もっとゆとりのある歩み方をしたい。遠いまなざしで、力を注ぐことや他のことに釣り合いのとれた生活をしようと思う。なお珠玉の数句を得るために百歌する意気をもつて・・・。

一月二日

月仰ぐ種族の孫は風仰ぐ

一月七日

木を植えた男の絵本縁あつて手にして見入るよく木を植えよ

一月二十三日

自らを急いて焦げる胃冬の日々

一月二十五日

人間の命数を知る寒の内

白蘭に添える弔文書いて知る命と言葉二つの重さ

一月二十七日

穏やかに夫は逝ったわたくしも悲しむまいと繰り返す叔母

二月二日

蜜柑吸う目白の優美人もまた身をつつましく心豊かに

二月三日

我が山が薄雪冠る姿勢を正す

二月六日

瞳孔を全開させて

世界を改めて見る

わたしは正しく世界を理解しているか

正しい行動をしようとしているか
新しい春と一緒に
新しい歩みを再びはじめる
光り輝く世界へ。

眼を病んだ人しずしずと廊下行くめぐる世界を目の当たりにし
一年にわずか数度の繁華街鯨の開きを昼食にとる

二月九日
春雨に竹一方へなびく山

山里に春を始める煙立つ

二月十日
雁の列名のみ春に乱されず

二月二十三日
春の雪意匠尽くせず消え果てる

嗚呼子美よ我れ志を言わず無歌の日々

定家にも歌の無い日々賤が男はむなしく春を多忙になじむ

二月二十八日

再び大陸へ渡る

三月一日

一卷の絵の川とゆく春に入る

(上海博物館)

幾春も見えた陶宝の刻む時

三月二日

万金を積んで開いた水郷の顛末を見た春はうららか

(周荘)

掘割に一つの双橋水の春

豚の脚瀋氏の酒家で食す春

石を敷く張府の私塾余寒あり

三月三日

虹橋ホンチャオに漢語ハンユを聞く春の夢

三月五日

周荘へ案内してくれた上海交通大学のマーケティングを勉強していると

いう女子学生にお礼のメールを出す。例の癖が出て、戯れに漢字を並べた詩のようなものを添えた。

「両三戯語」

東風渡海来浙江
周庄水边梅花香
潘氏富貴不足頼
酒家良肴充腹腔

甘肅の春雨寒く緑無し

三月八日

春寒や黄河見て飲む八宝茶

黄塵と昇る風見る不定の身

蘭州を行く河の名の水を見て行く時偲ぶ行人ひとり

三月十日

上海の学生からメールの返事が来た。The poem is lovely. So I have written an ugly doggerel just for fun. と言いたあとに次の詩が書いてあった。実に、わたしが漢字を並べる戯語こそ doggerel である。

三月十六日

陽春三月游周庄
風景撩人蹄勝香
太平曾時中日情
今朝再說緣未央

研究所の女性教授さんが、スペインからの来訪者をチベット寺院に連れて行くから一緒に行かないかと誘ってくれた。

玄奘も春の渴きの募る道

西域へ旅立つ道に緑見ず草も絶え絶え巡る春待つ

迷い来た蝶を厳しく拒絶する青海の山荒々しくも

色々のスカーフの人種を蒔く青海に今春は始まる

塔爾寺で十人ぐらいの警察隊を見かけた。後に知ったのだが、前々日にラサで住民と警察との衝突があつて死者が出るという事件があつて、警戒をしていたのだ。その時わたしは、緊迫した空気を感じ取ることができなかった。五体を地面に投げ出してはまた立ちあがつて祈るチベット人の胸中は大きく揺れていて、それだけよいに祈りは痛切であつたのかもしれない。

三月十七日

希求した春来て木々のさんざめき

三月二十日

金城の装い新た春の雨

遙かなる彼岸へ黄砂送る土地

(雨が上がつた午後またかすむ空)

黄塵に誰しも願う暮らしあり

三月二十二日

春眠を醒めて胡蝶と出会う蝶

三月二十三日

桃の花咲かす蘭州小西湖

双頭の龍船揺らす春の風

三蔵を求めレンギョウ咲く黄河渡る法師の遠いまなざし

三月二十五日

この地では皆ひたすらに生きている草木も人もただ切実に

三月二十六日

業終えた木蓮の花夕陽照る

三月二十七日

シュツシュツと散水の水類濡らし萌える緑と輪舞を踊る

三月三十日

梅咲けば釣れるを期せず竿を出す

悠久の黄河見つめる一刹那

四月四日

清明に輪を転がして遊ぶ子ら

木瓜老いて更に空なる輪廻の輪

四月六日

清明も終わり異国の花嫁が朱輦に乗って陽光の中

(カナダから)

四月七日

生かされて若草を食うひよこたち

四月十一日

破れ傘で海棠のそば行く男

海棠が眼を閉じて聞く雨の曲

金城に美を見る者は夢想する

* * 様

ご無沙汰しています。お元気ですか。

小生は蘭州に来てデューティのない客座研究員として日を過ごすという得難い経験をしています。こちらの給料をもらっているのです、いったん退職したのに、少しは何かをしなければと結構忙しくしています。達観というのは難しいことのようにです。

.....

今、研究所の教職員の住んでいるアパート群の一室に住んでいるのですが、先日の日曜日の昼前買い物に出かけようとしたら、門のところに赤い伝統衣装を着た人が何人も集まっています、その中に、赤い輿(輦)が見えました。すぐにカメラを取りに帰ろうとしたら、わたしを受け入れてくれた周さんが来たので、「何事ですか。結婚？」と聞いたら、どこかの会社のイベントでしようという答え。カメラを取って戻ってきたら、あなたの言うとおり結婚式だと教えてくれました。

伝統衣装を着た人たちは、招待所で花嫁の出てくるのを待っていました。花嫁が輿に乗ると、花嫁行列は銅鑼や太鼓や笙を鳴らして八旗や他のものを捧げ持って、敷地内の花婿のアパート前まで進みました。総勢五十人近くいたでしょう。階段入り口には「喜喜」のシンボルが貼ってあって、五階にある花婿の家にも別のシンボルが貼ってありました。

二十分ぐらい待ったでしょうか、やがて花婿と花嫁が下りてきて、花嫁は輿に、花婿はその前を歩いて、花嫁行列は華やかに通り出て行きました。近くで祝賀パーティをしたようです。ちょうど、退職後も契約して研究所に来ている老教授に会いました。中国でこのように婚礼を見たのは初めてだと言うと、老教授もわたしも初めてだと言うではありませんか。今の中国で、こういう伝統的な儀式をすることは珍しいのです。わたしは、被いの隙間から見えた花嫁の横顔が異国風だったのを不審に思っていたのですが、老先生の話では、花婿は三年前カナダに行き、花嫁とそこで知り合ったということでした。カナダの女性だったのです。国際結婚を祝うために、特別に伝統の様式を採用したのでしょう。花嫁になるというのは一生の中で一大事ですからとても興奮していたと推察できます。その上、西洋人が文化の異なる東洋に来て、伝統の衣装をつけて花婿の家に興入れし、花婿の両親に対面する儀式などをしたことは、強い印象となつて一生忘れられないでしょう。興味ある光景を見ることができました。……

四月二十一日 重たげな花金城の雪の朝 (八重桜)

四月二十六日 香る風瀟湘館に桃散らす

四月二十八日 半ば夢菜の花の咲く寧夏行く

街道の柳の下のタンポポを食う羊見てめぐり行く日々

四月二十九日

名山の春に詩を得ず李杜偲ぶ

崆峒山朱色の糸と新緑と

(朱の糸が木に絡めてある)

四月三十日

探春の後のけだるさ琴を聞く

崆峒にこがれ池中の蛙鳴く

五月八日

野鳩鳴くアカシアの木の大いなる

五月十日

征西の驃騎將軍小泉の甘露を飲んで武勲を目指す

(騎上の霍去病像)

冷や汗をかいてリフトで上り着く蘭山の上黄河見下ろす

木々のない山見はるかす高楼に咲く牡丹見て乾き覚える

*
*
さん

.....

四川省で大地震が起きて大きな被害が出ましたね。二万人以上の死者が出るのでしうか、大変なことです。蘭州でのわたしのオフィスは十二階建ての建物の最上階にあつて、大きく揺れました。高い建物もありますがまわりの多くの建物を見下ろす場所です。分近くも揺られていたでしょう。この建物は大丈夫だろうかと疑問も起きて恐怖を感じました。中腰になって下の方を見ると低い建物の人たちは広い中庭に出ているのに、こちらはまだ机にしがみついています。その日の夕方のテレビは百人あまりの死者を伝えるだけで、時間を割いて情報を伝えませんでした。震度七・八なら大きな被害だと予想されます。翌朝インターネットで死者が一万人を超えるという被害を知って、他人事ではなく心が痛みました。救助と復旧がすみやかに進むことを願っています。

胡主席が日本を訪問して日中の友好ムードが盛り上がったことと思います。CCTV9を見ていると、毎日聖火リレーのことを報道しています。中国中が北京オリンピックを待っている雰囲気が伝わってきます。しかし、あなたが日本の大学に入学した今年二〇〇八年は、北京オリンピックがあるだけでなくこのような大災害もあった年として記憶に残ることでしょう。

わたしは、北京から帰ってすぐ甘肅省平涼市の崆峒山という山に行きました。秦の始皇帝、司馬遷、李白、杜甫、白居易、林則徐などが登つて、詩人は詩を読んだそうです。わたしは忙しくしていて、また英語を話して暮らしているせいか、良い句を得られない

でいます。合計九日の旅で少しくたびれて帰ってきました。

以下は、北京旅日記から。

蘭州に初めて着いたとき、空港から七十五kmの長い道の両側の山々にはところどころ薄くくすんだ灰緑色が見えるとはいえ、はげ山が続いて荒涼とした印象を受けました。北京へ行くため二度目に通ったときは、もう少し落ち着いて観察できました。木々が緑を濃くする時期なのでその気配が見えます。よく見ると、山々の等高線に沿うように六十cmぐらいの帯状の平らなところが作られて、そこに植林してあることに気づいたのです。まだ一mにも届かない若木です。それが道の両側に延々と六十km以上続いていたのでしょうか。これだけの植林には大変な労力が要ったにちがいありません。感動をおぼえるほどです。この乾燥した気候では、一度植えても何割かは枯れて育たない木が出るでしょうから、後の手入れも必要でしょう。

最近知ったフランスの Jean Giono という人の『木を植えた男』という本を思い出しました。それは飾りのないしかし力強い文章の短い作品です。絵本にもなっています。英語に翻訳されて『The man who planted trees』という英語教材にもなっています。遼寧省でも郊外の山々に植林してあるのを見ました。中国で大変な数の人々が人力で植林を行なっていることが知られます。三十年後にこれらの山々に緑の林が甦ったら素晴らしいことですね。ぜひそうなつてほしいものです。あなたが将来その木々の中に立ったら、

それら無名の人々の努力に感謝することでしょう。

北京へは一九九五年以来二度目の訪問です。科学院の某研究所もそのまわりもすっかり変わっていました。前に泊まった宿舍は建て替わり、職員用のカフェテリアの他に民間の業者の入ったきれいなレストランもありました。繁華街は清潔になり歩道に不具合があるところを見ませんでした。趙老師とその夫人に案内してもらって紫禁城へも行きました。この規模にはやはり圧倒されます。前には太和殿やほかの建物の屋根に夏草が生えているのを見ましたが、オリンピックが近づいて整備されています。太和殿は改修中でした。

言い忘れてはいけません。大観園を訪れました。残念ながら宝玉・黛玉や宝釵ほかの人たちには会えませんでした。人形が留守番をしていました。大きな池を巡るように、登場人物たちの家々があります。登場人物たちがどのような生活空間の中で暮らし、ドラマを演じたかを想像することができました。怡紅院から廻って行って瀟湘館を出たところで、困ったことにデジタル・カメラの電池が切れてしまいました。紫禁城で撮りすぎたのです。一眼レフのいいデジタル・カメラを持って行っていた趙老師があとでCDに焼き付けてくれました。趙老師はまた、一九八〇年代後半にここでテレビドラマの撮影があり、その後整備されたと話してくれました。その時黛玉を演じた女優のイメージが中国の人たちを強く印象付けたそうです。みやげ店でその圧縮版のDVDを買いました。中国庭園は、時間にせわしくない人々の生活の中で、ゆったりと

のどかな風情をつくっています。楽しい時間を過ごしました。

しかし、もう一人の先生、『紅樓夢』を五回も読んだという人が小説の内容に触れながら説明してくれたら、もっと楽しむことができたことでしょう。

五月十八日

甘肅省博物館へ

コオロギが石に化すほど永い年イメージさえも持てぬ老人

恐竜やマンモスの骨組み立てた展示の最後人骨一片

労多い絲綢の道に人をして本性的に駆りたてるもの

五月二十九日

杭州探訪

六和塔初夏のさざ波鎮め立つ

夕涼み光の塔の立つ湖水

灯をつけた夜船蘇堤に客降ろす

五月三十日

雨期の霧に蘇堤はかすむ天と地と

白堤を白蛇の化した佳人行く

六月一日

時止めて西湖の合歓に絹の雨

雷峰の法輪かすむ紫陽花

櫓の船で相合傘の旅客行く

(西施と范蠡か)

六月二日

想念に三潭印月けむる雨

木陰下西湖に釣りをする東坡

苦境にも日を仰ぎ立つ蘇軾像

(月を仰ぐ種族)

道々また漢字を並べてみた、

楠木緑鮮蘇堤岸

小舟破鏡滑水上

杭州煙霧潤旅情
 明天蘭州我心旱

白堤に夏の陽浴びて黒い風

断橋の荷風の中で踊る人

不如帰旅の終わりの鐘を聞く

六月七日
 アカシアの街路いくつも蝶の子が命の糸に吊られて揺れる

六月十三日
 縄とびに興じる男女眺めつつ遠い日本の梅雨の日思う

六月十四日
 絹の道始まる町の桑の実を潤す雨はまた糸のごと

六月十五日
 トランプを楽しむ人に木漏れ陽の玉はゆらゆら蘭州の夏

* * さん

・
・
・
・
・
・

さて、また旅行に行ったのですかと冷やかされそうですが、五月の終わりに杭州へ行きました。わたしを受け入れてくれている二人の教授が杭州へ会議で出かけると聞いて、議論すべき相手が不在になるのなら、中国人が一度は行ってみたいと思う処へ行こうと思ったのです。……………

杭州は中国の人の言うとおりで素晴らしいところですね。湿度の高い日本に住みなれた者が乾燥した蘭州に住んでいて、そこから杭州に行ったのですから感激はひとしおでした。うつそうと緑に覆われた山々と水をたたえた大小の湖をとても美しいと思いました。木々も日本のものとほとんど同じ種類のもので、なつかしく感じました。中国北部の人々があこがれるのもよくわかります。西湖は、潟で閉ざされた湖沼を清潔な湖にするために改造されて出来たのですね。有名な三潭印月などの島々、白堤、蘇堤などこの悠々とした風景は人の手で美しくされたのです。美しさはこの広さにも由っているのかもしれない。西湖十景といわれる有名な観光ポイントの九つを巡りました。

日本のガイドブック『地球の歩き方』には、西湖という名は越の美女西施から来ていると書いてあります。蘭州の人たちと三潭印月の島を再訪した日には細い雨が降っていました。しっとりとした旅情を味わいながら歩いていると、もう咲いている合歓の花が雨に濡れていました。すぐに芭蕉の「象潟や雨に西施がねぶの花」の句が思い浮かびました。この句は秋田県の象潟で詠まれたのですが、象潟は西湖と同じく大小の島々を浮かべた名所でした。芭蕉は西湖のことなどを書物で知っていて、合歓の花を西施の比喩

に使ったのだと思われます。その句は雨に煙るここの気分にぴったりでした。

西湖にはあじさいの花も咲いていました。蘭州の人にこの花の名は何というのか聞いたら、「九轉綉花」という答えが返ってきました。わたしは、この花は日本原産で、海に浮かんで流されて中国に着いて栽培されるようになったものか、白居易がそれに「紫陽花」という名をつけたのだということ、そして日本でもあじさいにその漢字を使うのだと、話して聞かせました。白居易は杭州刺史として居た時にあじさいを見たのでしょうか。この杭州刺史は白堤を築いて、西湖を美しくし、また「白蛇伝」伝説の舞台を用意したのでした。

話は尽きません。これでもたくさんのことを省略しているのです。

追伸

最後の日の朝、蘇堤から白堤の断桥残雪のところまで一人で歩いたとき、男女二人の写真撮ったのでそれを添付します。白素貞の写真も撮りたかったけれど・・・

蘇堤の付け根には蘇東坡像があります。ここに記念館があるのを最後になって気づきました。しかし、開館時間よりも早過ぎて見学することはできませんでした。ただ回廊に蘇東坡の手紙や詩文を石碑にしたものが二十余り展示してあるのを見ました。以前に日本の展覧会で蘇東坡直筆の手紙を見たことがあります。千年前の人の墨跡はまだ残っているのでしょうか。この蘇東坡像はシンプルに様式化されたなかなかいいものです。

白堤近くまで来たとき、剣を杖のようにした女性の立像を見つけました。これは秋瑾像にちがいないと思つて近づくとやはりそうでした。台座の文字は孫文によつて書かれたものです。今ではわざわざ中国近代革命の闘士の墓を訪れる人も少ないのでしょうか、他に人影はありませんでした。男性像と一対にするためと、日本に留学した中国女性ということもあつて、この写真を添えます。

二十一世紀のあなたは、秋瑾の悲劇的な人生とはちがう道を進んでいますね。晩年の蘇東坡は不遇な目に遭いましたが、先輩の白居易の号のように楽天主義を貫いて生きました。少し天を仰いだ蘇東坡像はその楽天主義にふさわしいと思いませんか。

六月二十一日 散水をよけて見つけた夏至の虹

六月二十六日 ベランダにひょうたんと花夏至過ぎる

六月二十九日 贗物ものんびりと売る夏の市

影を得て大小の壁売る露店

七月一日 木陰縫い天水路行く夏の蝶

天水路散水を待つ乾く蝶

七月三日
紅巾を首に少年蝶を追う

七月四日
霧雨が大樹の形地に残しやがて降り止む蘭州の夏

七月七日
鳴る神が黄河に火炬を捧げた夜

絹の道超えて鳴る神ゼウス神黄河母神に挨拶送る

七月九日
夕刻七時蘭州発北京行き夜行列車で鄭州へ向かう。

蘭州に五日の月と黍の畑

麦の畑唐黍の畑眺めつつ甘肅の谷列車で下る

崖に立ち落ちる夏の日見る羊

七月十日
朝霧や土饅頭に眠る人

(紅白の鮮やかな紙飾り)

城壁の上の木陰で将棋して幾千の夏商の末裔

涼やかな玉製の斧の系譜見る

七月十一日

初蟬を聞いて河南を行く旅路

西瓜積む荷車も行く鄭開道

(片側五車線の大道)

開封府宮女の踊る夏の庭

鉄塔の厚さじりじり木魚聞く

闘鶏もクリンチをする京の夏

編鐘と古楽器で舞う宋の人見つつ茶を飲む清明上河

七月十二日

涼やかな武後の顔の廬舎那仏

石仏と伊河に網張る漁夫に風

千仏に巡礼あまた古都の夏

旅人が詩人の涼を煩わす

（白居易隱棲の地の墓）

緑陰の樂天堂に住まいせよ

七月十八日

滞在最後の日、研究所がわれわれ外国人を黄河上流のダム湖劉家峽と炳靈寺へ連れて行ってくれた。

河清待つ湖水を抱き乾く山

時刻む地層の下に食む羊

（奔流と巖壁との間の一筋の土地に）

天の下最初に衆生渡す岸

（天下第一埠）

流水がつくった崖の石仏は幾億年の時さかのぼる

七月二十日

記念館で魯迅のひげを思案する

（帰途上海に寄る）

帰国。予想していたよりもっと忙しい中に戻って、落ち着いて考える時間がなく、右往左往して日々が過ぎていく。涼風が発句促す無句の日々。またの日詩想が生まれそうになって、題名だけを得たがむなしく霧散した。

「今恩寵が」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

八月二十九日

海峡の日は早や落ちて灯をともし赤間の宮の秋の朱の色

秋の潮日脚と急ぐ戦船

虫数多安德陵の森の闇

(山中の宮内庁参考陵墓)

八月三十日

一人は文化六年逝った人念仏場に木魚の響き

九月五日

百舌の声むなしく移る日々を撃つ

人は無為、虫は奏でる、夜氣満ちる

九月六日

赤子抱き秋の清夜に抱かれる

閉じる眼に大地も失せて秋の夜

九月十一日

更生を期して我が脳困難な決断迫る、秋の海見る

共鳴の磁場の名残に揺れる脳昼食にふと煮魚選ぶ

九月十六日

眼を閉じて秋の陽射しに立つこけし

九月二十四日

秋彼岸草刈り守る山の里

閉塞の世に耐えている杉の森

九月二十五日

黄葉置く窓辺行き来し子をあやす

十月二日

秋晴れに僅は今日も試みる

十月五日

イノシシの乱した野道尾花採る

藪の中茶花にえらぶ烏瓜

十月九日

老健の色とりどりの紙の蝶想念は舞う秋の日向に

十月十一日

白骨の頭蓋に別れ告げる秋頭蓋を開く手術を待つ身

鳶の輪の上に鯖雲骨入れる

十月十九日

コスモスの上高々とシャボン玉

中国の青年たちと秋の日の古来の港眺めて語る

十月二十二日

秋雨や孫抱き不如意かみしめる

十月二十四日

たそがれに叫び森へと急ぐ百舌

十月二十九日

寝付かれず脳にミミズの鳴く夜長

十一月一日

耳の毛を刈ってこおろぎ聞く小道

収穫の後の畠に菊白く

十一月三日

詩情生む心弾まぬ文化の日

いたずらに老いて迷いの深い秋

十一月四日

幾たびも通った鉄路見覚えの山々を見て身を振り返る

脳手術延期すすきは花盛り

十一月九日

先駆けて赤く燃え立つ樹の下へ

幻想を売り四季のバラ咲くパーク

人工の海のカナルに散るもみじ

宮殿の庭を明滅さすコード

事多い年もしだいに冬に入る花火を仰ぐ海辺のホテル

十一月十日

海舟と竜馬の乗った練習船今観光のわたしを乗せる

十一月二十一日

新しい陽にまた時雨時刻む

十一月二十四日

冬の来た街を老兵物見する

しぐれ行く物見は人に遅れがち

冬の街囃して灯る電飾は行き交う人を少し励ます

十一月二十六日

列なしてイチョウの稚児の黄の衣装

紅葉の時の極みに立つ大樹

十一月二十七日

同窓の思いもかけぬ死の知らせ葬送も知らず呆然と聞く

不意を衝く訃報、聞き入る冬時雨

十一月二十八日 どのように終焉の時迎えるか友の死に遭い生き方思う

わが山は燃えていのちの法示す

十一月二十九日 古里の山と海見る露天風呂今年の疲れ癒やし首まで

十一月三十日 小春日や乳児眠りの中で笑む

つわの花幼児にぎわう家の庭

十二月四日 閉じる眼に西湖の合歓を濡らす雨

移り行く春夏秋冬しぐれ聴く

愚かさを味わいながら生きている既に鬼界の友思い出す

十二月六日 初雪を孫と喜ぶ山の寺

散る時を待ち白雪に遇う紅葉

十二月十二日

かけがえのない緑青の首の鴨創る波紋のスローモーション

冬暖か川と交感する老女

大き傘広げ人待つ冬の月

十二月十四日

買い出しに手車引いて暮れの道行く棟梁の老いを悲しむ

書齋と居間と食堂を兼ねたテーブルで構想願う老いた棟梁

十二月十五日

ころころとこの世ころがすタイヤ買う娘は既に二人の子持ち

十二月十八日

涸れ池に葦の尾花の野末行く

怒気残し山際の道枯れ葉踏む

肩越しに置き去りにする櫥の赤

魯田が熟れた色なす年の暮れ

十二月二十六日 鉄片と骨を仕分ける年の暮れ

鼓膜欠く耳に念仏木枯らしと

十二月二十九日 みすず詠む弁天島の埋立地鰺を釣り上げ年送る人

十二月三十日 田作りを煎って寿ぐ今日の生

二〇〇九年 正月
徐山亭 謹製



「自由人の信仰」
B・ラッセル

世界のあらゆる多様な事実の中に――木や山や雲の眼に見える形の中に、人間の生活の雑事の中に、そして万能の（死）の中にさえも――創造的理想主義の洞察は、自らの思惟が初めて造り出した美の反映を見出すことができる。このようにして精神は、自然という無思想の諸力を巧みに支配するのである。

